

# ※ 古文書カルテの見方

**各地震津波を識別しています**  
 (「史跡等位置図」と共通)。  
 K: 慶長津波、H: 宝永津波  
 A: 安政津波、S: 昭和津波

**地震名と記録されている市町村  
 区名(現在)を示しています。**

**引用した文献名を示し**

  

**地震津波発生年(西暦/和暦)を示しています。**

属性No	H-28	地震名	宝永	市町村名	香南市	地区名	夜須町	頁No.	1 / 1
西暦		和暦		記載文献1		記載文献2		記載文献3	
年	月日	年	月日	平岩陽子修士論文、1994		宝永大地震-土佐最大の被害地震-間城龍男著、1995		石塚淳一修士論文、1995	
1707	10.28	宝永4	10.4	現地調査結果					
記載内容				現地調査結果					
地名	西山八幡宮(夜須)			地盤高(m)	12	位置座標		133° 45' 37.5"	
津波高記載の有無	○・無			推定津波高(m)	33' 32' 39.6"				
浸水範囲等の被害記録がある場合、それを	半亡所			現地地形	その他				
津波高(m)について研究論文の推定値を記	6~7(平岩) 11~12(間城) 9.3(石塚)◎			地目	宅地				
文献抜粋				現地写真					

**現地で計測したおおよその位置座標と地盤高(現況)を示しています。**

  

**具体的な地名(地物)の記録がある場合、それを記載しています。**

西山八幡宮(夜須)

**現地で津波高が推定できる場合、それを記載し**

  

**具体的な津波高の記録がある場合、それを**

○・無

**現地の地形で津波被害(挙動)に関する特徴があった場合、それを記載しています。**

  

**浸水範囲等の被害記録がある場合、それを**

半亡所

**現在の地形で津波被害(挙動)に関する特徴があった場合、それを記載しています。**

  

**津波高(m)について研究論文の推定値を記**

6~7(平岩)  
11~12(間城)  
9.3(石塚)◎

**その他気付き事項があれば記載しています。**

  

**文献等に記載されている被害記録部**

[平岩陽子: 歴史資料に基づく四国沿岸域における津波浸水高の評価に関する研究, 修士論文, 1994, 付表]より転載  
 下夜須: H6~7m[但し, 津波高に関する記述文はなし]

[文献: 宝永大地震-土佐最大の被害地震- 間城龍男著, 1995, pp.64]より転載  
 夜須: 「夜須浜残らず、在所の宮の前まで流失」「下夜須半亡所、横浜の家悉く流る、潮は大宮の庭迄」「夜須横浜へ押し入り本村東西共潮入り也、横浜の並松残らず押し流す」 夜須浜の人家は全戸流失。また、海岸から1.4km内陸に入った、西山八幡宮前の人家も流失をした。津波は小丘上の八幡宮の境内にも入り、更に内陸に進んで「夜須の郷三十余町備後の下まで浪先来る」と、海岸から約3kmの備後付近にまで到達をした。  
 ●津波の高さ 夜須: 西山八幡宮の津波は「潮は大宮の庭迄」と、海抜高度約11mの境内に侵入をしているが、少し小高い高度12m余の地に建つ社殿には達していない。従ってここでの津波の高さは11~12mである。更に北流をした津波は「備後の先まで浪先来る」と、海抜高度14~15m程度の地点にまで到達をしている。  
 史料 谷隠記、板垣氏筆記、大地震大変記、谷氏年代記。

[石塚淳一: 四国における津波の実態把握とその氾濫解析に関する研究, 修士論文, 1995]より転載  
 (pp.66) 下夜須: 宝永津波は夜須町史によると、横浜、千切の集落をすべて流すとともに、夜須川を3kmほど通り備後、大宮の庭まで及び浜にあった根回り9mほどの笠松を赤岡沖にまで流した。この際、知切では砂丘の崩壊により、集落が全滅するという憂き目を見たため、後に東の山麓に高地移転することとなった。また、西隣の岸本でも主子の沖が広範に浸水し、民家はいうに及ばず、月見山麓にあった常楽寺でも床上まで浸水した。備後の地盤高は地形図より約10mと読み取れ、下夜須においても、赤岡、岸本同様に河川沿いあるいは砂丘の低い部分から浸入し、後背の低湿地を広範に浸水させている。.....  
 (pp.75) 下夜須: 半亡所、潮は大宮の庭まで、一西山八幡宮下の地盤高9.3mより、⇒H9.3m

**被害記録位置周辺の地形図を示しています。写真撮影をした場合、撮影位置(赤丸記)と写真番号(赤字)を示しています。**

  

**注意事項**

- 過去の津波発生時と現在とは、地形や土地利用状況が違うため、同じ高さの津波でも浸水域・浸水深の影響は大きく違います。
- 津波被害記録の中には、被害を受けた場所を示すものとして、地名や集落名といった広い範囲を示す記録もあります(右図参照)。今回、このような記録については、役場やその集落の中心となる位置などに代表させて表示しています。
- 位置情報については、今後も精査を続けていきます。

香南市赤岡町の例

【文献記録】  
 「潮は在所残らず流家三ヶ一」  
 「本町赤岡川の浜残らず流失」  
 「岸本赤岡の町一軒も残らず押し流し申す也」

記録位置は「赤岡町役場」を代表集落としてプロット

被害の記録は津波発着時を全滅にわたる